対象作品／新美南吉著『手ぶくろを買いに』偕成社

人間はいいものなのか

弘前大学教育学部附属小学校　中井太陽

「ふんわりしていてかわいい絵だな。」

本の表紙の、母さんぎつねが子ぎつねの手をにぎっている絵がとてもかわいかったので、この本を読んでみたいと思いました。

ぼくが一番好きな場面は、

「母ちゃん、目に何かささった、ぬいてちょうだい、早く早く。」

と、子ぎつねが母さんぎつねの所にころげて来たところです。目には何もささっていませんでした。お陽さまがキラキラとてらしていて、雪がまぶしいほど反射していたのです。あまりに強い反射をうけたので、目に何かささったと思ったのです。その、「何か目にささった」という作者の表げんが、読んでいる人たちをおどろかせて、おも白いな、と思いました。

ぼくが一番ドキドキした場面は、子ぎつねがまちがって本当の手を出してしまったところです。ぼくは、母さんぎつねが言っていたおそろしい人間に、子ぎつねがつかまってしまうのではないかと、とてもドキドキしました。子ぎつねは、光がまばゆくて、めんくらって、まちがった方の手を出してしまい、ぼくは、どじだけどちょっとだけかわいいな、と思いました。お金が木の葉ではなく、本当のお金で、母さんぎつねはよく本当のお金を持たせてくれたな、と思いました。ぼうし屋さんが毛糸の手ぶくろを持たせてくれて、ほっとしました。

「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」

と、母さんぎつねはつぶやきました。ぼくはさいしょ、きつねをおいはらう人間を、おそろしくてひどいと思いました。けれど、母さんぎつねの友だちは、あひるをぬすもうとしたのでおいはらわれました。人間もきっと、きつねがいたずらをしたり悪いことをしなければ、おいはらったりつかまえたりしないのではないかと思いました。「人間はこわくなくて、やさしいところもあるよ。」と、母さんぎつねにつたえたい

です。